古河市兵衛と渋沢栄一

飛鳥山の旧渋沢邸の近くに旧古河邸があります。この旧古河邸は、旧古河財閥の創業者である古河市兵衛の邸宅です。近くにすむ市兵衛と栄一には、いったいどんな関係があるのでしょうか？

市兵衛は、１８３２年（天保３年）京都岡崎村で木村長右衛門と母みよの次男として生まれました。生家は酒屋で代々庄屋でした。幼名は、巳之助。市兵衛が生まれたころには、生家は没落しており、豆腐の行商をするなど貧しい生活を送っていました。27 歳の時、京都の豪商・小野組で番頭をつとめていた古河太郎左衛門の養子になって、古河市兵衛を名乗るようになりました。小野組では、市兵衛は生糸の輸出、米穀や蚕卵紙の取引などで商才を発揮して多大なる貢献をしていました。明治７年（1874）から、東北の阿仁・院内の鉱山経営は小野組が一手に行うことになり、市兵衛はその責任者となったのです。ところが、明治政府の突然の経済政策の変更によって、小野組は経営破綻をしてしまいました。その時のことが、「渋沢栄一伝」（現代語訳）に記されています。

「古河市兵衛という実力者がいて、生糸、鉱山、種紙、米といった商売をやるという。小野組と古河市兵衛の両方に対して第一銀行はかなり融資をしていた。ところが、金融が逼迫してきて、借金の担保もなくなり、ついに支払い停止。小野組が潰れれば、第一銀行まで潰れてしまう。私のもとを訪ねて来て古河市兵衛はこう言った。『小野組が閉鎖するために、あなたにご迷惑をかけ、せっかく創設した第一銀行を潰すことがあっては、申し訳ない。私の方にある財産を糸でも米でもことごとく差し出すから、すぐに正当な手続きをしてください』と。そして、倉庫の米、生糸など、さらに自分の給金や貯金も全て抵当を提出したおかげで、第一銀行には大した損失が出なかった。いかにも男らしい立派な措置。勇気ある人でなければできないことであり、私も深く感心した。」

財産整理の結果、銀行としての損失は巨額にならずに済みました。小野組の本家は潰れましたが、栄一の資本提供もあり、市兵衛は、明治８年に鉱山経営に着手し再起しました。これが古河鉱業(現･古河機械金属)の創業であり、古河グループの創始となったのです。

明治 10 年、市兵衛は、自身の運命に光と影をもたらすことになる足尾銅山（栃木県）購入を決断します。周囲は大反対でした。江戸時代に掘りつくしたといわれていたからです。しかし、市兵衛は、坑道を開発し、トロッコを走らせ、照明は油でとり、蒸気ポンプを使い、電話を設置し、電気による製銅法を用い、水力発電所もつくるなど、新技術を駆使して、豊かな鉱脈を再発見し、大量の銅を産出しました。銅は７０％以上海外に輸出され市兵衛は莫大な富を獲得します。

しかし市兵衛は、やがて未曾有の事件の渦中の人物となります。足尾鉱毒事件です。明治１５年頃から、渡良瀬川の魚が減ったとか、田畑の実りが悪くなったといった苦情が出ていました。鉱毒の被害は加速し、周囲の農民が抗議におしかけ、警官が出動する騒ぎも起こります。明治２４年、衆議院議員田中正造が国会で足尾銅山の鉱毒を弾劾する演説を行い、終生この弾劾をし続けます。明治３０年には、田中は足尾銅山操業停止請願運動を起こします。

このことは、市兵衛の生涯に影を落とし続けましたが、当時の世界の先端技術を取り入れ、日本有数の大企業を作りあげたのも事実です。市兵衛は陸奥宗光の子供、潤吉を養子にし２代目としますが、潤吉は若くして亡くなり、実の男児は三代目の虎之助のみでした。

虎之助は、北海道大学と東北大学と九州大学と三つの国立大学創立に多大な資金提供をしています。北海道大学の古河記念講堂は有名です。現在、旧古河邸に建つ立派な洋館は、1917 年に古河虎之助の本邸として、鹿鳴館の設計者としても有名なジョサイアコンドルに依頼し、陸奥宗光邸跡地に建てられたものです。1923 年に起こった関東大震災の際には、自宅建物に被害がなかったため、邸内を開放し、都心や下町から押し寄せた避難者約 2000 人を受け入れ、医療団に負傷者の治療に当たらせました。また、バラック住居 86 戸を建てて避難者 524 人を収容するなど、虎之助は、大被害で傷ついた多くの人々を助けました。

市兵衛死後、古河鉱業は多角化経営に移ります。主なところで、古河機械金属(旧古河鉱業)、古河電気工業、富士電機、富士通、日本軽金属ホールディングス、日本ゼオン、ADEKA(旧旭電化工業)、横浜ゴム、朝日生命、みずほフィナンシャルグループなどです。

この文章をつくっている私の PC も、富士通です。富士（フジ）は古河がドイツの企業ジーメンスと技術提携した時、フルカワの「フ」とジーメンスの「ジ」を取り合わせて作った商標です。市兵衛の功績は名前を変えながら、今も行き続いているのです。

渋沢栄一と古河市兵衛が盟友として互いに助け合い、協力し合ったことで、現在の日本の経済があることを改めて垣間見ることができました。